シュピール

幸谷遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シュピール

【Ｎコード】
Ｎ７２５３Ａ

【作者名】
幸谷遥

【あらすじ】
試みのために大地を歩み続ける人間Ｎとそれに同行する群れからはぐれたジャッカルの話。

枯草の荒野・1

美しいものはただ美しく、それに意味などないということを知りたい。

美しさは何処にある？
塀で囲われた庭から見上げる青空のなか。
私と彼とあなたの間。
見つからないし届かない何かに。

Nは歩き続けるだろう。足が動くかぎり、動かないと思っても動けば前へ進むのだ。
誰かに言われたのかもしれないし、誰に言われた訳でもないけれどそうするしかなかったのかもしれない。それはどうでもいいことだった。少なくともNだけが知っていればよいことだった。彼は歩く。その後ろ姿を砂漠で生きるジャッカルが一頭、追い掛ける。
「待ってくれ」
と、ジャッカルはNに呼び掛けるがNは振り返らなかった。
「群れからはぐれてしまったんだ。俺は迷子だ。あんたを襲ったりしないさ。ね、何処に行くんだ」
やはりNは返事をしなかった。ジャッカルが諦めて余所の方向に行くのを待っているようだった。着いてこれるものなら、と言われ

ている気になったのでジャッカルはこうなれば根比べだとNの後を追い掛けた。
　こうして一人と一頭が枯草の荒野を行くことになった。ジャッカルはNの三、四メートル後ろを歩いて距離を縮めようとしなかった。Nが振り返るのを待っていた。
　太陽の照りつけが厳しくなり気温が上がった。
ジャッカルの舌はだらんと伸びて呼吸が荒くなっていた。反面、Nと言えば汗をぬぐうことさえ時たまで、疲れた様子もなく歩いていた。Nが踏み分けた草をさらに踏んで、ジャッカルは自分がとても遠くまで来てしまったことに気付いて空を見上げた。空は晴れていた。地平の辺りに白い雲が浮かんでいた。
　Nもまた空を見上げていた。後ろからジャッカルがずっと着いてきていることは勿論気付いている。声をかけようとNに駆け寄る姿を視界の端に捉えていたからだ。
　ふっと歩きながら息をついた。まだ歩かなければならない。あのジャッカルは思いのほか気長く自分を追い掛けている。そして、Nが話す気になるのを待っている。上着のポケットに手を入れた。少ない持ち物は全部その中に入っていた。
　Nとジャッカルがたてる草を踏み分ける音のリズムが狂った。ジャッカルが一度にNとの距離を縮めたのだ。あまりにジャッカルが勢いづいていたものだから、Nはジャッカルの気が変わって襲いかかってくる思って身を堅くした。
　ジャッカルはNではなくNのすぐ後ろのくさむらに飛び掛かった。がさがさっと音がして唸り合う声が聞こえた。
　よく見ると小さな獣とジャッカルがもみ合っていた。とは言っても大きさはジャッカルとたいして変わらず二匹は上になり下になりを繰り返して闘った。Nは手出しすることも出来ずに立ち尽くしていた。していた。そしてまた、今更ながらジャッカルの毛皮が金色をしていることに気付いて微かな感動を覚えた。
　ジャッカルの牙が獣の耳を引き裂くと血が数滴散った。すぐに身

を翻し、獣は後方に飛んだ。それは黒い毛皮のリカオンだった。
「逃げろよ！まだ仲間がいる」
ジャッカルが鼻先を振ってで示すほうに三十頭あまりのリカオンの群れが控えているのをNは見た。三キロばかり離れてはいたけれど、見通しのいい荒野ではずっと近くにあるようで安心できない。
あれが本隊で、先陣はあの一匹と別の二匹でNとジャッカルから間合いを取って身構えていた。

枯草の荒野・2

上着のポケットから素早く拳銃を取り出すとNは三匹のリカオンに向かって二発立て続けに撃った。命中させるつもりのない空砲の射撃だったがリカオンは本隊に帰っていった。
「あいつらあれぐらいで諦めたりしないよ！」
ジャッカルはNの上着の裾を引っ張って急かしたが、Nはそれまで以上に早く進もうとしなかった。
「今はああやって遠巻きに見張っているけれど夜になったら一気にやって来るよ。早くここを離れるんだ」
なかなか進まないNになかば苛立つジャッカルをNは呆気に取られたようにじっと見ていた。
「ああ……あのさ、助けてくれてありがとう」
そこでジャッカルは我に返った。
「礼はちゃんとあいつらを振り払ってからだ」
またそこで初めてジャッカルもNの顔を間近に見たのだ。Nの眸は灰色で、真ん中は墨の色をしている。
「きみ一人ならどうとでもなるだろう。行ってしまえばいい」
そう言いながらNの眸が細かく震えるのを見て、これはさみしい生き物なのかもしれないとジャッカルは思った。
「それはよくない」
とにかくNを見捨てて行く気はジャッカルにはなかった。
「ここから逃げても俺が群れに戻れるわけではないもの。きみ一人であいつらを相手にするのもしんどいじゃない。だからどうか俺を一緒に行かせておくれ」
そうして一日で最も太陽が高くなる時間、Nとジャッカルは並んで荒野を歩いていた。日が暮れるまではまだ間があった。
「一番いいのはあいつらの領域から立ち去ってしまうことだ。勝手をしないかぎりあいつらはなんにもしてこない」

ジャッカルがそう言うのもあって何喰わぬ顔をして道程を続けた。早足で進む彼らを、黒と茶の斑が調和した毛皮を持つ一匹のリカオンが追跡していた。
リカオンの狩りの成功率は８５％以上とも言われており、狙われた獲物は集団で追われ捕まる。
「逃げてもずっと速いままで追い掛けることが出来るんだから。どんなにとがった角を持ったインパラだって疲れてしまえば敵を突き刺す元気もない」
枯れた草は踏み分ける迄もなく地面に這いつくばっていた。太陽は頭のほぼ真上を通って影はほとんどなかった。
「ところで君は荷物を持っていないが遭難者か」
Ｎは首を振った。方角はわかっていた。
「ふん。じゃあ毛皮をなくしてしまったのか？」
「毛皮？」
なんだ知らないのか。ジャッカルの尻尾が揺れた。少し考えてＮは問い返した。
「それは聞いてもいいこと？」
ジャッカルの背中の毛が黒いところを見て言った。
「例えば俺の王様はマールバールというライオンだ」
こういった自分にとって当たり前なことを説明することに慣れていないジャッカルは言葉を探して話していた。
「彼は古くからのいきもので、生まれてからずっと王様なんだ。そういう動物は、もう一つかたちをもっていてね、毛皮を脱いで人間のようなかたちを持つのさ。あんたは違うんだね？」
Ｎに問い掛けると彼は、後ろからリカオンが姿勢を低くして耳をぴくぴく動かしながらついてきていることを確かめた。
「違うさ。聞いたことはあるがね。ローンとかセルキーと呼ばれて。あれはアザラシだった」
「海のやつらか。マールバールの王様が仰ることにはかつては今ほど自分達のような存在は珍しくなかったそうだよ。陸地ではほとん

どいなくなっちまったが海方はまだ少し数があるそうだね」
すん、と鼻を鳴らして草の匂いを嗅ぐ素振りをジャッカルがしたので、Nは地面の様子が変わってきたことにきづいた。枯れて朽ちた色をした草に黄色いものが混じりはじめていた。
「雨が降ったのだろうか」
「だとしたら最後の雨さ。もう乾季が始まっているからね」

枯草の荒野・2（後書き）

今回、改めて執筆にあたって作中に登場する野生動物について調べてみたのですが、かなり私の認識に誤りがあって焦りました。詳しくは申し上げませんが、すでに発表してしまった分の誤りにはどうか寛容のほどをお願いします。　竹内芳実

枯草の荒野・3

何処をどうというのは定かではなく、地図のどの辺かなどというのは大きな問題ではなかった。

後ろをつけてくるリカオンの息遣いを気にしながら、Nとジャッカルは一本のアカシアの傍を通り過ぎた。雨季であれば何頭もの草食動物が群れを成していたであろうけれど、その周囲は閑散としていた。水場を求めて群れが移動した後なのだろう。

草原の片隅でヌーが群れを作る。群れは何頭かの有力な雄を中心に作られる。群れは縄張りを持つ。その場で群れの一員でないヌーが草を食べることはタブーだ。

ライオンはヌーのそれを上回る範囲を縄張りにする。縄張りの中にはヌーの群れが数個含まれている。ライオンもまた家族で群れを持つ。縄張りを持たないライオンは乾期の前に起こる草食動物の移動につき従い獲物を狙う。一頭のライオンが一年間に食べるヌーの数は二十頭程度だと言われている。

ライオンの縄張りの中には当然ジャッカル、ハイエナ、リカオンといった小型の肉食獣や空を行き交うハゲワシといった鳥類も生息している。ライオンはハイエナが仕留めた獲物を横取りして食をつなぐことの方が多い。ハイエナはライオンが近づいてくるとあさっりと仕留めたものを譲るのだ。

マールバールは草原のすべてを支配していた。彼の一族のほか、ライオンというものがいなくなってしまったせいもある。その中で“毛皮”を持つのは彼だけだった。

その日は朝から晴れていた。これで晴天は十日目である。

乾季の到来は生存競争の激化でもある。果たして群れの何頭が生き残るのだろうかと、木陰に寝そべりマールバールの王さまは地面

から水分が蒸発していくのを眺めながら考えていた。
不意にマールバールから数メートル離れたところで枯草が舞い上がるのを見た。やっと来たか、と待ち受けていた相手を迎えるべく身を起こした。
やってきたのは草地を這う蛇であり、草原に似つかわしくない色をしたものであった。
「お前は“蛇”ではないのだな」
注意するならマールバールが待っていたのは蛇と呼ばれる人格であり、その人物もまた蛇の形をとった。
「名代で来たのです。わたくし、メスカリンペヨーテと申します。若輩でございますがお役に立てるよう善処いたします」
メスカリンペヨーテと名乗った蛇はあわてたように頭を振った。するとその場には仕立てのよい衣装に身を包んだ年若い男があらわれた。
「信用の証にこれを預けるよう言いつけられました」
マールバールはメスカリンペヨーテから“毛皮”を受け取った。
「承知した。それではお前と契約しよう。内容はもう知っているね？」
メスカリンペヨーテはマールバールの声が思いのほか若々しいのに驚いた。それでも話しぶりは穏やかで威厳が感じられるもので王者にふさわしい。
マールバールの問い掛けにはいと言ってメスカリンペヨーテは笑みを見せた。
「乾季の間、服従し貴方の庭園を維持することです」
その通り。マールバールは頷いた。
「庭園は夜に案内しよう」
メスカリンペヨーテははいと返事をする。
「そして、早速だが一つ言い付けよう。側近のドミニクが見当たらないので連れてきておくれ」
「そのドミニクと言いますのは？」

「何もかもがはしこいジャッカルさ。私の唯一の話相手でもある。最も今はただの迷子だが」

返事をするかしないかの間にメスカリンペヨーテは行ってしまった。

一陣の風が吹きさってひとり残ったマールバールのたてがみを揺らした。

枯草の荒野・4

一緒に歩いてぽつぽつと言葉を交わすうちに、Nはこのジャッカルがただ者ではないな、と感じてきた。そこで、
「君は毛皮を持っていないのか」と尋ねたのだが、ジャッカルの返事は素っ気なかった。
「生憎と持ってないね。別にあったっていいことばかりじゃない。昔話の通り、毛皮を盗まれたら取り返すまで帰ってこれないし、盗った奴に従わなくてはならない。それは本当の名前を知られることと同じくらい面倒なことだ」
そこまではなすと話をさえぎるようにジャッカルが後ろを振り返った。あとをつけるリカオンとの距離がここにきてようやく大きく開いていた。
「どうやら境界に近づいたようだ。空に向けて銃を撃ってみて」
Nは言われた通りにした。あの破裂音が辺り一帯に響くと、リカオンは舌を出して飛びはねたあと、尾を振りながら引き返していった。
「わかってくれたようだ」
そろそろと銃を降ろし、Nが言った。二人はしばらくリカオンが立ち去っていくのを見ていた。
「俺たちは、草原では、種が違うとお互いに口をきかない。それは便利だけど、不便だったりもする」
ふいっと顔を見せないジャッカルの口振りは弱々しく響いた。
『言葉が違うわけではないよ。言葉が違うようになったのは人間との間だけ。昔は彼らも動物達と話したけれど、人間はどんどん話し方を忘れていった』
たたたっとNの記憶を走っていった声の主が誰であったか思い出せなかった。ただ、（ああ空の青さは変わらないのに、あの人のいたところとずいぶん違うところに来てしまったな）と思って再び疑

問符が浮かんだ。
「どうして言葉は使われないの」
「食い物にするとされるの関係だもの」
二人の歩みは完全にとまっていた。小休止というわけだ。
「君は何処から来たんだろう。人の住まない土地にどうして来たの。俺の言葉が通じるね。それだって変わっている。人間がわかるはずはない。だから俺はあんたを毛皮を持ったやつだと思った。……ねえ、どうして言葉を使わないかなんて聞くんだ。我々に思いを交換する必要なんてないじゃないか。俺はガゼルを喰う。リカオンから獲物を巻き上げる。何をされてもあとに残さないためには、お互いを理解しない、出来ないことが大前提だ」
ジャッカルは激しく地面に尻尾を打ち付けた。彼が語ったことは彼の思考のパターンだった。草原に生きる獣たちは怒りというものを滅多に持ち出さないのだろう。
「言葉を自由に操るのは毛皮を持っている方々だけだね。彼らはものを喰わずに大昔から生きている。ここでマールバールが王様なのはね、食の連鎖に彼だけが加わらないからだ」
ああ、それだとするとNは本当のところ何であるのだろう。
何にもわからないまま二人は別々の思いで、静かに途方に暮れていった。
何処にいこう何処にいこう。リカオンが追ってこなくなった瞬間、再び進むあてを失ってしまっていた。

枯草の荒野・４（後書き）

間が空いて申し訳ないです。初めての方はもちろん、以前に私の作品を見かけて、また今回読んでくださったという方に感謝します。

枯草の荒野・5

Nもジャッカルもそこから動く気をなくしてしまって、同じところに居続けることが安全ではないとわかっていながらいつまでも枯れ草の地面にめいめいの姿勢で足を休めていた。そこは木陰でもなかったし、特別過ごしやすい処じゃなかったけれど。

Nが腰を降ろすとジャッカルと頭の高さがずっと近くなって、話すのに具合がよかった。

「どうやって群れからからはぐれたのか聞いていいかい？」

Nは質問を続けた。まあいいさ、とジャッカルは腹ばいになった姿勢のまま話し始めた。

「この時期になると蹄のあるいきものは一斉に水の在り処に行ってしまうから、その一つについていく旅をしていた。ついていったら喰う物に困らずこの季節を越せるからな。俺がはぐれたというのはその群れ、ヌーの群れだった。俺自身の群れはとくに持っていない。家族は一緒にいたこともあったけど、ばらばらに散らばって、みんなそれぞれにうまくやっているさ……ああそれで、俺のほかにハイエナや、なわばりを持たないライオンたちもまた、その群れを追っていた。日を重ねるにつれて群れの数は膨れ上がった。いまだってどんどん増えているだろう。とてつもなく数は増えるから、毎日俺たちがやつらを喰い続けようが全然たいしたことじゃない」

ジャッカルは空を見上げた。太陽がだいぶ傾いて夕べの近付きを感じられた。涼しくなる夕方から活動を始める生き物はことのほか多い。何日かに及んだ旅のあいだに、見知らぬ土地に来たことは確実だった。このジャッカルは相対的に生まれてまだ日の浅い部類含まれるのでそんな場所に行き当たることもあっただろう。

（太陽はきんいろ。周辺の空を白くぼかしている。それにしても、このNはずい分おとなしく話をきく。もう少し質問などして話の腰

を折ってくるものだか。相鎚さえ打たずにじっとこちらの顔を見ている）

けれど普段ことさら会話を重要視しないジャッカルはそれほど気に留めなかった。

Nだって言葉をかわした経験が少ないのか、それは子供のように目を大きく開いて話を聞いていた。だからジャッカルもつられて瞬きを数えるようにNの目を覗きながらゆっくりと続きを話し始めた。

「俺が群れを見失うほんの直前に俺は腹が空くのを収めようとした。まだ子供のヌーを狙った。角も生えていなくておまけに親がそばにいなかったからだ。いま思うとそこからおかしかったんだよ。じっとして様子をうかがっていたらさ、突然そいつは群れの列から飛び出したんだ。ヌーに限ったことじゃないけれど、どんな子供も身をもって群れから離れてはいけないことを知っている。だからそいつはおろかとしか言いようがない。だから俺は追いかけた。ヌーが小さいからといって足が遅いわけじゃないけれどさ、負ける勝負じゃなかったよ。……でも俺は負けた。あいつはうまいことにげてしまったし、俺はこうして本来あるべき処を見失ってしまった。あァア！それで俺はこのまま飢えて、死んでしまうかもしれないって目にあっているんだよ！」

ジャッカルがやけになって尻尾を激しく地面に打ちつけ、Nはどこか腑に落ちない顔をして指をそっと曲げて枯草の幾筋かを掬いとった。

「死ぬ？」

そこだけがNの中にうまく合点がいかないようだった。

「ああそうさ。雨が降らないときに群れを見失うってそういうことだよ。うまく別の群れを見つけられるかもわからない。どこに行っても“一匹だけ”はひどく弱い」

Nはジャッカルの話に耳を傾け、自分についてあることを自覚した。そしてそのことを言葉にするための沈黙のあと、こう言った。
「僕は死がどういうことであるかは知っていても、死と自分の関係については無知だ。少なくとも僕の近くに死はなかった」
Nの様子が変わったことを感じ取ってジャッカルは今一度、Nを見据えて言った。
「生きるために生きているものを犠牲にしないでいられるはずがない」
本当のところ、ジャッカルにはNが何を思っているのかわからなかったからこんなことを言った。実際のところ誰が見てもNは虚ろだった。
「いいや。死はあった。だけどそれは君の狩りの話のように、自分のことではなかった」
ゆっくりとNは立ち上がり、焦点の定まらない眸で空を見上げた。自然にジャッカルの視線も上を向く。はっきりした声でジャッカルがNに言った。
「世界は簡単にできている。中心と果ての地だ。中心は一つしかない。ここは東の果て。動物たちの安住の地。西の果てには人間が住んで、南には海しかなくて、北には雪の国がある。けれど世界は球であるからさ、果ては多元的に重なり合っている。お前はそのうちのどれかから来たのだ。重なり合ったそれぞれはとても近いから何かの拍子に擦り抜けたのかもしれない。俺にはなんにもわからないけれど、帰れるんだったら早く帰ってしまえ。お前は何も知らなさすぎる」
空を見つめたまま、Nはふらついた足取りでのろのろと歩き始めた。ジャッカルは追おうとはしなかった。
数歩Nが進んだところで、ぱっと風が吹き、枯草をが音を立てたと思ったらNの姿はこつぜんと消えてしまっていた。
ジャッカル・ドミニクは厳しい面差しでそのあたりをにらんでいた。

枯草の荒野・5（後書き）

とりあえず枯草の荒野というのはここまでです。おつきあいありがとうございます。

花よ凍れ・1

あまりにも昔のことだったので、蛇はそのことを忘れていた。だから住み処にて寛いでいたときにそれを思い出すと、さっと背筋を伸ばして立った。

気は進まなかったが、約束ならば守らなければいけない。

彼は一度あたりを見回してから、途方も無く広がった衣裳の裾をつまみ上げると、そこにある何かを越えて姿を消した。

どういう仕組みかはともかく、次の瞬間に彼の住み処の外にいた。蛇がこのときいたところは“果て”の対となる“中心”だった。ところでそこは地獄の口とも呼ばれる土地だった。闇の女の懐近く、そこに住むのは怪物たち。

蛇の住居はその地面の奥深くに構えていたので、彼が何かを始めるときにはこの“中心”から始まる。青空の下、この空が続くかぎり蛇は約束を守る。彼がこれから向かうのは北の地。冷たい雪の下、凍りついた霊魂が眠る。

中心と果ては離れている。離れているというのは、辿り着くために時間がかかるということ。

蛇の旅もまた面倒で時間が掛かった。中心から北へ北へと進むことでしか北の果てには辿り着けないせいだった。ほかのどの場所でもない世界の果ては遠い。

とはいうものの、蛇はまるで竜巻のような凄まじさで陸の上を、海の上を進んだので、道中でいくつかの集落を踏み潰していったかもしれない。約束の刻限にまだ間に合うというのに彼は急いでいた。

北の地には、生きず死なずのあの吸血鬼、ピストゥが棲んでいた。蛇は彼のもとに行こうとしていた。

とある地点に到達したとき、すでに夜だった。衣裳の裾をぬらし

ながら蛇は雪と氷の混じった地面を進む。彼の歩みは体重を感じさせず、その身体が雪に沈むことはない。脚を動かしているのかもわからないくらいだった。
ああ、ここが北の果て。天頂できらめく星たち。吐き出す息も白く染める雪の世界。
ところが訪ねるピストゥの居住地はまではまだ少し遠く、陸地を横断して氷の海を渡った場所にあった。

蛇は動かない。天頂に目をこらしてそれが来るのを待っていた。待つために、蛇が急いでやって来た理由だった。
星と星の間をにらむ。まだか。冷たい空気が蛇のほおをなぜる。沈黙。緊張と静寂。そして息吹の音。
……来た！…ついにやって来た。おお星が落ちて来るぞ。尾を引き消えていく。ところがこれを蛇は待っていたのではない。待っていたのは消えずに地上に落ちてくる星。
あれだ。視界に入るとそれは星ではなく人の形をしていた。Nだった。
「ちゃんと帰ってきましたね」
Nと蛇の目が合ったので彼は言葉をかけた。次の瞬間、着地。
北の地にやって来たのはピストゥと約束があったから。でもNがここに落ちてきたからでもあった。それは単なる偶然。それとも蛇には二つの事柄という流れ、運命とも言い換えられるものが交差するところが見えるのか。
蛇から数十メートル離れたところだったので、雪に埋まったNをひきずり出すためにに歩み寄った。落下の衝撃のせいでNに意識がなく、目を瞑っていた。そこからひきずり出すと、Nを担ぎ上げて再び旅立った。

花よ凍れ・2

いい具合にNはまどろんでいた。実際のところ誰かに運ばれる感覚は心地がいいものだし安心。ところが蛇の一言で反転。

「もういい加減おきてんだろう」

ごろんと雪のうえに投げ出されていた。目を開いて場にそぐわないほど着飾った蛇の姿を捉えた。この地において月の光のほか灯りなどなく、Nの目は暗闇に慣れていなかったがその人影が蛇であることがわかるほど、彼は特徴的だった。

「こんばんは。その、お久しぶりです」

蛇は夜だろうとそこにあるものが見えるようで、しどもどするNの様子に見下ろしていた。

ところがはっきり見えないとはいえ、何となくそんな蛇の様子がわかってNは余計に落ち着かない。ふん、とかすかに息をついてようやく蛇が口を開いてようやくNの緊張はとけた。

「あァこんばんは！よいお目覚めで！でもそんなことはどうだっていいんです。ほら行きますよ」

蛇が誰のところに向かっているのかはわかっていた。この地にほかに訪ねる者なんていなかったからだ。立ち上がり蛇のあとに続こうとした。

「寒いです」

さっきまでかんかん照りの草原にいたので当然Nは薄着だった。そのうえ雪に埋もれたり転ばされたりしたので服が湿っていることに気付いた。

「そうかい」

それは大変だ、といやな感じに笑って蛇は背を向けて歩きはじめていた。Nはそれ以上何もいわずに彼のあとを追うほかなかった。

彼らが歩いているのは一応道であるらしく、足もとが幾分しっか

りしていた。毎日誰かの手が加わっているのは確かだった。
歩き始めてからNと蛇との距離は開くばかりだった。それというのも蛇が人間離れした足さばきで雪のうえを歩くものだから、暗いので足もとも覚束なくて雪に足をとられながらいくNがついていけないのも当然だった。
蛇は振りむくとわざわざ顔をしかめて非常にいやそうな顔をした。それでもNが追い付くのを待った。
「まったくあたしがあんたを担いでったときのほうが速いじゃないか」
そして、頭の上に気をつけなよ、と言われて見上げた夜空には流星。
「あれは何？」
「魂。死んだら皆ここにくるんだよ。北の地っていうのはどうも重なり合った世界のなかでも一番下にあるらしい。お前もさっき東の果てから“落ちて”きた」
蛇も流星を見上げていた。Nは魂は落ちてどうなるのだろうと想像を巡らしていた。
「おやそんなことを気にするのか？もちろん地面に落ちるとも。でもあとからあとから雪が降り積もっていくもんだから、すっかり凍ってしまうんだよ。そうしたら眠たくなる。魂は凍てついてはじめて安らかに休めるというわけだ」
話ながら蛇の指が頬を這っていた。蛇の指は白く長く、爪が鋭く尖っていた。確かな張りもあって肉のついたものだというのにNは人形に触れられている気分がした。
蛇というのもまた、手触りを確かめるようにNに触れていた。その間、蛇はNを自分の手元を見ていたが、不意に目だけを動かして上を見た。
「魂がどうやってくるかなんて知らないがね、ふつうあたしらは重なり合ったところの中でも果てと果ての間しか行き来できないだろう？降りるか昇るかの、ね。けどあの魂どもは違う。だから魂の通

り道がわかれば地上の何処からでもここに辿り着けるというわけだ。
え？便利だろ。ぐんと距離が縮まるよ」
何かがやってくるらしく、蛇とNはじっと空を見上げた。
「何が来るんですか？」
蛇が口角をぐいっと釣り上げてから答えた。
「乗り物だよ。あたしのほうが速いんでまだつかないんだ」
つまり蛇ひとりでは必要がないということ。
「申し訳ないです」

花よ凍れ・3

「ああそういえばだ」
待っているものはまだやってこないらしく間を埋めるように蛇が口を開いた。
「アンタに預けたもん返してもらえないかね」
はて何であっただろう。Nは首をくるりと向けている蛇の顔をまじまじと見返した。途端に蛇の顔が険しくなる。
「忘れている！あんたはこれだよ。いいよいいよ。それが都合のいいときだってあるんだからさ」
感情に任せたかのようにまくしたてたあと、Nに手を差し出した。蛇が腕を突き出す動作があんまりにも速くってNにはその動きが見えなかった。
「いいかい。あんたのかくしに入ってるもんを寄越しな」
と言われてポケットを探れば、あのピストルが出てきた。そういえば彼自身はこれがどういういきさつで自分の手に渡ったのか覚えがなかった。当たり前に自分の物だと思っていたが違ったのだろう。蛇の言っているようなものはこれしかなかった。
「いいよ。それだ」
Nの手からそれを取ると、もてあそぶように確認した。
「少しばかり使ったようだね。だが思ったほどじゃない。やはりドミニクに任せてよかったようだ」
蛇はその単なる道具ではない銃を撫でる。
「ドミニク？」
「ほら草原でイヌといただろう。あいつの性格なら名乗るまい」
Nの中で色々合点がいった。つまりジャッカル・ドミニクが、ヌ

ーの群れを見失うことは蛇によって仕組まれたというわけだ。
「正解セイカイ。あれには悪いがあたし急いでたもので、説明する暇がなかったよ」
蛇がどれほど偉いかということがNにわかってきた。蛇の傲慢ともとれる態度の裏にはその答えがある。
「ちゃんと彼の御主人には断っているとも。あのまま迷ったままになんかしないから安心しなよ。また会えるとも」
引き金に指をかけたまま銃口を覗き込みながら、あんたが覚えていればね、と付け加えた。Nは本当にこの蛇というのは一言余分だと思った。
「お前をからかってるだけだよ」
そしてどうも心中を読んでくるらしい。やりにくい相手だ。
「おしゃべりはおしまいだ。やっとあれが来ますよ。ほら立つんだ」

何かが近づいてくる気配があった。その影が見えると蛇は口元だけ歪めて笑った。
「遅い！」
突然蛇が現れた白い影に向かって叱責した。
「何処で道草喰っていたんだ」
それは見事な白い馬で、たてがみも混じりけなしの白。月光の下毛皮は灰色がかった光沢を放っていた。蛇の言葉にうなだれる姿が本当に申し訳なさそうでNの面白みを誘った。
「乗りなさいよ。馬具もつけてある」
馬に乗った経験などNになかったが、蛇にどやされてはたまらないので何とかFの背によじ登った。結果として蛇を見下ろす形になって居心地が悪かった。
「まあ様になってるじゃないか」
感心したように蛇が言うので一層に落ち着かない気分になる。

「こいつの名前はFだ。手綱は持つんじゃないよ。ちゃんとこいつは向かう方向を知っている。たてがみも掴んじゃいけないし、首に身体を預けてもいけない」
蛇の言葉にいちいちうなずく。一通り話しおわると蛇は馬の首を軽く叩いた。するとそれが合図だったのかFが歩き始めた。
「すぐに追いつくよ」
徐々にFが速度を上げはじめた。
「…待って！」
Nがあわててを引き止めると蛇の表情がまた険しくなった。
「何だよ」
調子を狂わされたのか蛇は機嫌が悪くなったかに見えた。それでもNには言わなければならないことがあった。
「お願いです。寒すぎてもう耐えられません」
そう。蛇に一度寒さを訴えて一蹴されてからNは凍えるのをじっと我慢していた。しかしここに来て、馬に乗って雪原を駆けるとなるとそれも限界だった。
Nの切羽つまった様子を目にして蛇も観念した。そこで自分の上着を脱いでNに突き出した。
「これで文句はない」
「ありがとうございます」
蛇自身は上着が必要でないのかと思ったが、ここでまた何か言うと今度こそ彼の機嫌を損ねてしまいそうなので口をつぐんだ。それに蛇の上着はマネキンに着せてあったかのように体温が残っていなかった。
今度こそFは地面を蹴り駆け出した。
上体が吹き飛ばされそうにNは全身に力を入れた。それに慣れると周りを見る余裕ができた。しかし雪原の暗闇。何も見えないので景色を見ようとするのをやめて空を見上げた。
時折流れていく流星が目に映ると微妙な既視感が生じた。
蛇の口振りだと自分はここにいたようだ。少しは覚えていないも

のかと記憶を探ったが無駄だった。　そもそもどうしてこうも記憶が曖昧なのか。昔はこうでなかったことは確かだった。原因があるだろうと思いを巡らしたがわからない。

そうこうしているうちにFはさらに走行のスピードを上げた。

花よ凍れ・3（後書き）

本当に進行が遅くてすみません。いつもありがとうございます。

花よ凍れ・４

あの枯れた大地。ジャッカルがいる。彼はじっとメスカリンペヨーテを窺っている。

「蛇の元から来ました」

ジャッカル・ドミニクは彼を見つめ返した。

「マールバールの御方言い付けられましてお探ししておりましたのですが……」

ジャッカル・ドミニクが吠えてメスカリンペヨーテに最後まで言うのをさえぎった。メスカリンペヨーテは感情の無い顔をジャッカル・ドミニクに向け、ジャッカル・ドミニクは下からメスカリンペヨーテを瞬きせずに睨みつけた。

「迎えに来てくれたんならありがとう。でもなＮが消えてすぐにやってくるとはさ、しばらく様子見してたんじゃないのかよ」

メスカリンペヨーテの登場からＮについて蛇の意向がある気がした。確信は持てなかったが蛇の人となりを多少知っているジャッカルはメスカリンペヨーテもまた油断ならない存在と見なした。

「あなたの思う通りですよ。あなたとあの人間が会話をしていたあたりから私はすでにあなたを見つけていました。あの彼は私の主人である蛇に縁のある者ですが私は面識がありませんし、勝手に接触を持つわけにいきませんでしてね」

そう言いながら大股でジャッカルに近付いた。感情のない目で見下ろしながらメスカリンペヨーテはこの警戒心を向ける生き物に話せることと話さないことのさびわけをすませた。

「信用していいものなのかね」

警戒を解くつもりはなかったがメスカリンペヨーテが近寄るのは阻止しなかった。

「してくださいよ。実のところわたくし日差しに弱くございましてね。あまりこんなところで長話したくないです」

大袈裟に両手を頭上で振った。
「じゃあどうやってここまで来たんだ」
その問いにメスカリンペヨーテは立てた左の親指を地面に向けて答えた。
「地下を通って」
「水脈か」
ジャッカルは幾分警戒の素振りをやわらげた。
「ハイ。御方々に学びまして」
「俺には真似できんがね」
ここで始めてメスカリンペヨーテは、その過剰に整った顔に笑みを浮かべた。
「私には出来ます」

蛇とN、メスカリンペヨーテとジャッカルがそれぞれ移動している間も、マールバールは一人枯れ草の上に身を横たえていた。
「今日は慌ただしいな」
こんど彼を訪ねて来たのは蛇でもなければ、誰でもない、茶金の瞳を持つ者だった。
「何の用かな。あんまり悪い気を持たないでおくれよ。昔からライオンの王様は狐にたばかられるものだからね。私は下手に返事も出来やしない」
居住まいを正すこともなしに応対を始めた。一連の動きがこの彼、きつねと呼ぶ。に起因することをマールバールは知っていた。
「俺は蛇を追ってきただけだ」
きつねはフンと鼻を鳴らした。
「俺はお前を信用しないよ。お前はいつも蛇とぐるだからな」
「何とでも言うんだな。蛇ならここにいない」
遠くにいたライオン達が少しずつ取り囲むように近づいてきた。
「王さまというのは敬意を払われなきゃ威厳が保てないのさ。その

点お前は不遜ときているから私のやりにくい相手であることこの上ない」
威嚇のうなりをあげるライオン達に臆することなくきつねは立っていた。
「本当のことを言えよ」
我慢も限界というようにきつねは苛立たしげに右足を踏み下ろした。
「嘘はついていない。今この草原にいるのは配下の者だ」
「今いるのはあのガキだけ。じゃあその前は？俺がやって来るまでにもう一人来たんだろ？」
マールバールは鼻先を空に向けてからきつねに目をやった。少しばかり長く話しすぎた。
「隠すこともない。察しの通り蛇だよ。お前にはこれで充分だろう。早いところ行ってしまえ」
しばらく二人は睨み合った。
「一通り探したら帰るさ」
来たときと同じ、きつねは風のように立ち去った。

「お前あのNが何なのかしっているんだろう」
一方ではジャッカルがメスカリンペヨーテを問い詰めていた。水脈が通っているところまで移動している途中だった。メスカリンペヨーテは思案げに首をそらす。そらすと目に入るのはどこまでも煙った水色。
「人間ですよ」
「あんなおかしな人間がいるもんか」
ごまかされそうな気がしたのでメスカリンペヨーテに喰ってかかる。
「この世において人の形をした神様じゃない生き物は人間です。人

の形に限りなく近いものが異形です」
ジャッカルが牙を見せたのでメスカリンペヨーテは口をつぐんだ。
「意地悪はこのへんにしましょう。あれはね、心臓を盗られちゃったんですよ。きつねに。見兼ねた蛇がかわりのものをいれてやったんです。でもかわりだからちょっとおかしいんですよ。記憶が曖昧なのはそのせいでしょう」
ジャッカル・ドミニクの眸が揺れた。
「ろくでもない」
一言それだけ呟いたきり何も言わなくなった。
「彼は自分の心臓を見つけるまで死ねません。そういう契約なんです」

花よ凍れ・5

――信じるのをやめたのだ

「まあ遅い。」
いつの間に追い越されたのかNにはわからなかった。かまわず蛇は言葉を次ぐ。
辿り着いた場所はどうやら岬で、冷たい風が頬に当たった。耳に潮騒が届いた。寒いといっても海は凍っていないようだ。
馬であるFは汗をかいている。
行き止まりだ。ここからどうしたいのかわかっていても立ち止まるしかない。
「海を越えますよ」
「馬で？」
蛇は笑った。自然な笑みだった。
「空だって駆けられる」
それに答えてFが自身ありげに身を震わせた。
「そういえば思い出したのですけれど」
何をだ。蛇がいう。
「ピストゥという人はその……」
「半死人だよ。それで？」
あんまり会いたくないのだとは言えなかった。しかし言わずとも蛇にわかるのだった。
「仕方ないですよ。あんたの胸に収まっているそれをあれがつくったんだから」
そうなのであった。さらに蛇はあのピストルを取り出した。
「この馬鹿ぎつねの産物だってピストゥがいなきゃどうにもならな

いんだよ」
馬鹿ぎつねとの因縁浅からぬ彼でもそれが何であるかまで把握していなかった。だから尋ねた。蛇は口角を吊り上げた。それは笑みというより威嚇のような凄味があった。
聞くべきではなかったのかもしれないとNが内省しはじめたら、急に蛇の姿が消えてしまった。いや、先に行ってしまったのだ。
どうしたものかと微少な混乱をNにきたした。息を吐いた。ここで立往生するわけにもいかない。
「蛇のあとを追ってくれるかい？」
Fは迷いなく駆け出した。速い。星が流れていく。
引っ掛かったままでいることが全部この模造の心臓に集まっている。たまったまま出ていかない。
顔にあたる風圧に耐えかねて目を閉じた。瞼の裏は暗い。
さらに固く瞼を閉じあわせた。じんわりと淡い形をなさぬ像が浮かび上がる。これらの感覚的なものはNにとって懐かしいものだった。
爪先に水飛沫が掛かり、冷たさは痛みを伴った。痛みはNの内に何かを巻き起こしかけたが、ついには記憶の混濁に飲み込まれていった。
ああどうしよう。
鼓動の不規則を自覚した。欠陥の多い心臓は明らかな故障をみせた。
岸辺はまだだろうか。
目を薄く開く。何も見えなかった。音もまたFが風を切っていく音しか聞こえなかった。
くすんと鼻が鳴った。不安だったけれど、それはNに大きく響かなかった。
心臓が感情を飲み込んでいく。Nはそう思った。
もはや慣れてしまった急激な眠気がNを襲った。振り落とされる恐怖から眠気にあらがおうとし、Fに必死でしがみついた。

その健闘も虚しくNは意識を手放した。

世界を終わらせる一発。

そんなことをあの人物は言っていた。

やはりNには何のことだかわからなかった。あれと蛇の持つものが同一であることが繋がった。

けれどNはそのことについて口をつぐむことにした。忘れたふり気付いていないふりをすることにした。無駄なことかもしれないがそれぐらいしないとおもしろくない気がした。

蛇は味方でもない。信用ならない。改めて確信を持った。

意識を手放す前にNが考えたこと。

花よ凍れ・5（後書き）

更新に間が空いたうえ短くて申し訳ないです。

地下庭園・1

世界の果てから海の水は零れ、奈落に注ぐ。

ジャッカル・ドミニクとメスカリンペヨーテ。
人の手など加わらないはてしない原野のただ中で異質な建造物に辿り着いた。
風化しつつあり屋根は崩落していた。この石造りの小屋が彼らの言う地下水脈への入り口だった。
メスカリンペヨーテがすでに役割を果たしていない木の扉を崩した。そして彼が一歩踏み出すと、さらにその脚の間をジャッカル・ドミニクが通り抜けていった。
「危ないですよ」
蹴ってしまうかもしれません、と続けた。
「そんなことになったらお前に噛みつくだけだ」
ちらりと振り返ってドミニクが言った。肩をすくめる思いで、メスカリンペヨーテはドミニクに歩み寄った。
ドミニクが立ち止まったところには、地下へと続く扉が床に打ちつけられていた。
「この扉は朽ちたりしないのだな」
細工も当時のまま、宝石はおろか金箔にだって遜色なしときている。
「当然仕掛けがあるんでしょう」
メスカリンペヨーテには興味がない。ドミニクもまた同感だった。
「あなたは鍵を持っていないのですね」
「どうやって持つんだよ」
確かにジャッカルは物を持ち歩いたりしない。

「お前の方は鍵を持っているのか」
「名代ですもの」
取り出された鍵は扉と対であることが明らかな細工が施されていた。
扉を開くと暗闇があり、かすかに水の流れる音が聞こえた。
「梯子を降りられますか」
地下へ銀色のはしごが続いていた。
「やってみてもいいがね」
決断しかねてドミニクは暗闇に首を差し入れて深さを計っていた。
「かなりありますでしょう。落ちたらことですよ。かつぎましょう」
ジャッカル・ドミニクはそこらへんのところ素直にメスカリンペヨーテの言うことに従った。
メスカリンペヨーテが扉を閉め、内側から再び鍵が掛けられた。
地下の大分深いところに水脈があるためはしごをくだり切るのに時間がかかった。
扉を閉じてからそこは全くの暗闇で、はしごの銀色など常人には見分けられないものだが、二人とも夜目が利く方だったので何の問題もないようだった。
その間、ジャッカル・ドミニクは大人しくしていたものの終わりが近づくとメスカリンペヨーテの肩から離れ自分の足で器用にはしごを降りていった。
水脈の通り道はちょうど下水道のように人が通れる足場がありその隣を清らかな水が流れていた。
「この水が閣下の庭園に注いでいるのですね」
つまりこの流れに従って進めばマールバールの元にたどり着くのだ。
「水を管理することがお前の仕事さ」
「私は仕事の内容を詳しく知らないのですが。ご存知なら歩きながら教えてくださいな」
今日はずいぶん話さなければならないな、とドミニクは思ったが

そこらへんも観念していた。
「庭園にはあの木があるんだよ。あれを枯らさないために蛇はやって来ていた」
ジャッカル・ドミニクが先に立って移動を始めていた。後ろを歩くメスカリンペヨーテが一つの言葉を反復した。
「あの木？」
「あの木だよ」
何の木であるかもはや暗黙の了解だったのでかまわずジャッカル・ドミニクは続けた。
「木のそばに墓があるんだ。そこの守が俺の仕事なんだがね。この時期は蛇がやるはずだから仕事はない」
そういうわけでジャッカル・ドミニクは自由のはずだった。草原を走り抜けていたのだ。
蛇がメスカリンペヨーテを名代に立てたのは本当に急だった。
「わたくしは何にも知りませんもの。だから閣下はあなたを呼び戻されたんでしょう」
ジャッカル・ドミニクは返事を返さず黙々と歩みを続けた。なんだかすっきりしなかった。
そして彼の及ばないところではるかに重要なことがこの乾期に起ころうとしていた。

地下庭園・2

暗い通路には、小さな羽虫や蛾が飛び交っていた。それらの虫が立てる羽音が耳元をかすめていった。

ジャッカル・ドミニクとメスカリンペヨーテは無言のまま進んでいった。二人とも通路の暗がりの先で待ち構える者の存在に気付いていた。その者の瞳は暗闇でなお、黄金色に光り、瞬きとともに明滅した。

瞳の煌めきに吸い寄せられるように一匹の大きな蛾がその者の鼻先に飛んでいった。二人はその様子が見えるまで近寄っていた。

突如、その者の牙のある口が大きく開かれたので、二人は歩みを止めて目を見張った。

その者とはあのきつねのことで、蛇の行方を掴めなかった腹いせにやって来たのだった。

次の瞬間、きつねは己の瞳に引き寄せられてきた蛾に牙を立てて喰いついた。あざやかな紋様の羽が牙の間から覗いて、咀嚼する度に羽の欠片と鱗紛が口唇からこぼれ落ちていった。

ごくりと蛾を飲み下してようやくきつねは口を開いた。

「久し振りだな。そうだろう？」

ジャッカル・ドミニクはきつねと面識がなかったので、これはメスカリンペヨーテに向けられた言葉だった。

「忘れてしまいました。いつのことですか」

「嘘はいけない。成長したようじゃないか、ガキが」

互いに険悪な物言いであったので、ドミニクは間に入ることも、ましてやメスカリンペヨーテに味方するつもりもなかった。

「あんたのとこの奴よりはましだ」

「あいつはお前よりよっぽど手前の立場をわきまえているさ。なあ」
これら一連のやり取りで自分達を待ち構えていた相手が何者であるかドミニクは悟った。
きつねは大仰に腕を広げた。
「俺は単に挨拶をしに来ただけだ。元気そうでなにより。それだけだ」
誰がそんなことを信用するものか、とメスカリンペヨーテは心中毒づいてとなりのドミニクを見た。ほら見ろ。彼だったきつねを信用していない。
しかしメスカリンペヨーテは己が到底このきつねに及ばないことを自覚していた。油断していようがなかろうが、きつねに出し抜かれることを用心しなければいけない。例えば黙っていろと言われた蛇やマールバールの動向についてなど。
「そのとなりのイヌはなんだ」
ジャッカル・ドミニクの耳がぴくりと動いた。彼に素性を明かすことはよくないことだと思った。
「マールバールの臣下のようだが見たことがない。まあいいさ」
ドミニクを見たきつねの口元が吊り上がった。きつねが笑みを浮かべた顔を真正面から見ると背筋が寒くなった。
「お前は俺の同類だな」
声をかけられるに至って、ドミニクは自分がどこに足をつけて立っているのかわからなくなった。
「何てことを言うんだ！」
メスカリンペヨーテが大きな声を上げたのとほぼ同時にきつねは姿を消した。後にはメスカリンペヨーテの声がこだまするばかりだった。
きつねが立ち去っても二人はしばらく立ち尽くしていた。
「お前がああやって怒るとは思わなかった」
長い間のあとにドミニクが言った。そのころに平静に戻ってこれ

たのだ。
ドミニクの言葉にメスカリンペヨーテは興奮気味に返した。
「気付かなかったんですか？あなたあいつに面白半分に連れていかれるところだったじゃないですか！」
そんなことになったらマールバールの御方が悲しみます、と興奮が冷めてきた調子で付け加えた。

地下庭園・3

空があまりにも青かった。
吸い込まれるような青という言葉通り、青みをました空間を見つめただけできつねは浮遊感を味わった。
気を取り直して大地に目をやった。地平線の向こうまで枯れ草に覆われた土地が広がっていた。
蛇を探すあてをなくしたのでいまだにきつねは東の果てをうろついていた。そしてそれにも飽きたところでその場に腰を落としてぼんやりしていた。
このぼんやりがくせものなのだ。昔はこうではなかった。あることを堺にきつねは以前のようにいかなくなった。
それまでのきつねというのは、こんな風に何も考えずにただ座っているだけなんてことは決してしなかった。
このこと自体はたいしたことではないのだ。何も考えずにいることは悪いことではない。きつねはそう思っていた。しかし変化は憎かった。変化の原因もだ。そして、原因とは蛇の毒だった。
かつて蛇ときつねが激しく争った頃、何度目かの対決のときだった。とうとう蛇がきつねののどに牙をたてた。蛇の毒は猛毒だったけれどきつねは死ななかった。しかしただですむわけにもいかず、それ以来きつねは思考が時折ひどく鈍って何も考えられなくなった。きつねは自分をこんな風にした蛇をいまいましく思う。
身体は重い。愉快と程遠い感覚。こんな感覚はいらない。

「あれを何処にやったんだ」

“あれ”は失敗作だった。腹を立てて投げ捨てておいたのに、知らぬ間に消え失せていた。蛇の仕業だ。“あれ”なら誰にも気付かれぬように移動出来るだろう。

“あれ”が何処にいったのかきつねはわからない。八方塞がりだった。
しばらくして気を取り直したきつねが次の行動に移ろうとした頃、空は青みを消して夕方の彩りを浮かべていた。

同じ頃、ジャッカル・ドミニクとメスカリンペヨーテは地下水脈の分岐点に立っていた。ざあざあと流れる水音は大きく、上方からは自然光が降り注いでいた。

「あれは井戸ですね」

狭く地上へ続く穴から見上げた空の色から日没が近いことがわかった。
「庭園に至るころは夜になっているでしょうね」
きつねの言葉の毒が効いてきたのかジャッカル・ドミニクは無言だった。メスカリンペヨーテはジャッカルの様子に言及することなく一人で話し続けた。
「井戸は……」
ジャッカルが重々しく口を開くと通りすぎようとした井戸の光を見返した。
「井戸は蛇が蓋をしてあったはずだ」
「あの御仁はここから入って来たんでしょう」
あの御仁とはもちろんきつねのことで、メスカリンペヨーテは出来るだけ呼び名を口にしたくなかった。
「……早いところ閉じた方がいい」
また悪いものが入ってくるかもしれないと、ドミニクは思った。

地下庭園・4

マールバールの王様は自分たちが滅びゆく存在であることを知っていた。マールバールは彼が本来、王と呼ばれる者ではなかったことを思う。

真に百獣の王と呼ばれるライオンたちはこの世から消え去っていた。かつてライオンがマールバールの一族だけになるより昔、二人の王様の時代があった。とても昔で、気付けばその王たちの目にかかり、言葉を交わした一族の者がマールバールのほかにいなくなっていた。

二人の王はそれぞれの一族を率いていたが、ひとつずつ断絶した。そして東の果ての地に、ライオンは無位のマールバールとその一族だけになった。

そして二人の王よりさらに時代を遡る頃には皇帝として君臨した一頭がいた。その一頭はマールバールはもちろん二人の王よりも大きく、勇壮だった。偉大な皇帝は蛇やきつねと対等で彼らは同じく太古のいきものだった。このライオンも一族を率いていたが滅び、代わりに二人の王が跡を継いだ。

地下庭園は元々、皇帝と呼ばれたライオンの持ち物だった。このライオンがいなくなった後、遺志により蛇が一度預かり、二人の王が譲り受けた。二人の王がいなくなったときも同じく、蛇から王様になったマールバールに地下庭園は渡った。

マールバールの王様は、このライオンたちに永遠に及ぶことはないと思い、絶えることのない忠誠を誓った。彼らはそれに値すべき人物だった。彼らがそろっていたあのときこそ、黄金期と呼べると、王様は考える。

一人の皇帝と二人の王が守ってきたものを蛇から受け取ったとき、マールバールは己の弱さが恨めしかった。偉大な皇帝一人が守って

きたものに、二人の王の力が要ったというのに、その二人よりも劣るマールバールの力量不足は明らか。だから、王様は蛇の助けをかりた。

ついに綻びが出た、とマールバールは感じた。しかし自分は綻びの場所に気付けない。

マールバールの一族もまた衰退している。

東の果てと呼ばれる草原は、少しずつ失われて、遥か昔、皇帝の頃に較べると格段に狭くなった。

二人の王の一族も、そのために住み処を追われていった。滅亡は遠い未来ではない。それでも、一人の皇帝と二人の王から譲り受けたものを最期まで、彼らがそうしたように守ろうと王様は考えていた。また新たな王が選ばれるのかもしれない。しかしそれは王様にはわからなかった。あとの采配は一度庭園を預かる蛇がふるう。

「ループを呼べ」

王様は一族の者に命じると群れの中から二頭が駆けていった。それを見届けると王様は群れから一人離れた。

一族のライオンたちは王様の背中を見つめた。誰も、小さな子供でさえ彼の代わりになれないことを悲しんだ。王様の悲しみの理由をまだ知らなかったというのに。

マールバールの王様は地下庭園に向かった。

その頃、北の果てのピストゥは思わぬ来客に手を焼いていた。客人はピストゥの知らない者だったので、彼は小さな家の窓を叩いた少年に少なからず戸惑っていた。

「キュメルといいます。こんばんはピストゥ。きつねを知りませんか？」

窓を開けるなり、彼はそういった。ピストゥはそれで少年がどう

いう類の者かわかった。
「お引き取り願いたい」
「ここに来るはずなのですが」
「来ても俺は会わない」
方々から主人が嫌われていることを少年は承知していた。
「ああ、じゃあ蛇がここに来るのを確かめてから帰ります」
せっかくきつねの頭が鈍ってくれたというのに、抜け目のない奴が味方につくとは皮肉だとピストゥは思った。そして彼は諦めた。彼には少年を追い返すことも、少年のことを蛇に知らせる術もなかった。
蛇が約束を忘れていればいいのにと思ったが、そんなことはありそうになかった。

地下庭園・5

サイのルップは地平線にわずかにしか見えなくなった太陽に背を向けた。夜に活動する彼にとって、このときが一日の始まりだった。

枯れ草を踏み分けて、前日見つけた水溜まりへ向かった。それは見つけたときより一回り小さくなっていたけれど、あと数日は保ちそうだった。

水際に近寄るとルップの大きな影を見て、逃げ出す小さな姿があった。逃げる必要はない、と思った。こんなとき何故我々に種の違いがあるのだろうとルップは考える。彼もまた“毛皮”を持つ生き物だったが、どれだけ長生きをしても自分達を支配する掟の真意が知れなかった。蛇ときつねのようにそれらを利用する者達はどうなのだろう。ルップは思索を続ける。

水面から顔をあげると、ルップと水溜まりを挟んだところに二頭の雌ライオンが立っていた。マールバールの命を受けた、あのライオン達だった。

「マールバールが呼んでいるのかい？」

ルップはそれとなく察して対岸のライオンに呼びかけた。その声は低く、落ち着いていた。

「その通りです」

ルップから見て右側のライオンが答えた。老成した女の声だった。

「行こう。大事なときなんだろう」

大きく頭を振り上げて、ルップが前足を踏み鳴らすようなそぶりをして駆け出した。その後を遅れながら二頭のライオンが追った。ルップは以前に、取り決めた通り地下庭園にまっすぐ向かった。

きつねは思案のはて、再び地下に潜ることにした。その判断はまず正しいようだった。空には星が。夜の始まりだった。そしてここで、物語の異なる二つの流れがぶつかった。
「きつねじゃないか」
鷹揚に、きつねを呼び止める声があった。地下庭園へ移動中のルップが時を経て、そこに辿り着いたのだった。後を追う二頭のライオンは、大きく差をつけられたためその姿は何処にもなかった。
「お互い長生きなんてするもんじゃないな」
久しぶりにあった知己に、皮肉な笑みを浮かべてきつねが言った。
「長く生きて若輩を脅かすのは感心しないな」
ルップはきつねがここにいるのを見て、マールバールが自分を呼んだわけがわかった。彼はきつねが苦手だ。
「生きてれば根性も悪くなるとも。さて、その様子だとお前は今回も俺の側につく気はないんだな」
「できるならどちらにもつきたくないんだがね」
蛇ときつねの際限なく繰り返される闘争。彼らは時間を持て余している。闘争は周囲を巻き込みながらも、二人にとってはただの駒遊びのように見える。ルップは正直うんざりしていた。それを感じ取ってかきつねが軽口をたたく。
「へえ、中立か！しかしお前の愛すべき王様は蛇の味方だ」
「彼はまだ若いから仕方ない。自分の意思と他人の意図の区別がつかない」
「甘やかすなァ」
きつねの瞳が金色に光る。そんな、二本足で立つきつねの姿をじっと見てルップは疑問を投げかけた。
「きつねよ、毛皮はどうした？」
「こんな暑いところで、あんなもの着てられない」
「嘘だな」
言うや否や、ルップはきつねに向かって突進した。きつねは簡単

に跳ね飛ばされて、宙を舞い、右肩から音を立てて地面に落ちた。ルップの様子は冷ややかだった。顔を歪め、仰向けになりながらきつねは本当のことを言った。小さな声だったがルップにちゃんと聞こえた。

「キュメルにやった」

それがおいそれと出来ることではないことは確かだった。

「何故そんなことしたんだ」

きつねの胴体はルップの角によってぽかんと黒い穴が開いていた。貫通はしていなかったが血は流れない。横たわった姿勢から、両手を地面について立ち上がるときつねは一気にまくしたてた。

「俺だってうんざりしている。もう今回でおしまいだ。それで俺が勝つ。あいつを頭から食い尽くしてやる。それでおしまい。あとのことは残ったやつが勝手にすればいい。止めるならお前からだぞ。え？もう一度聞くぞ。ルップ、お前はどうするんだ？」

ルップは落ち着いていた。きつねがこんなことを言い出すのはこれがはじめてではない。毛皮を誰かにやったという以外は。

「私はマールバールの元に行ってから決める」

慎重に答えたルップの返事を、きつねは認めなかった。

「駄目だね」

そう言うと彼は腕を振り上げた。ルップはきつねの胴体にあいた穴を見た。

数分後、二頭のライオンがルップに追い付いたときには二つの流れが出会った結果があった。より強大であった方が一方を飲み込んでしまったあとだった。

「早く行こうか」

追い付いたライオン達に何事もなかったかのように、ルップは言った。きつねの姿は何処にもなかった。

「約束に間に合いそうにありません」
井戸から外に出たメスカリンペヨーテがドミニクを見下ろしてさらに続けた。
「ここを塞いで御方の元へ行けば夜更けになってしまいます」
彼には暗闇の中、ドミニクのぼんやりとした輪郭と獣の目が見えた。ドミニクはメスカリンペヨーテの影のような姿を見て言った。
「どのみちよくないことが起こるんでも何も手を打たないよりましだ」
彼はメスカリンペヨーテの力量がきつねに及ばないことを感じていた。おそらくここを塞いでも、あのきつねには大きな問題とならないことも。
「ではドミニク。僕はここを外から塞いで御方の元に。あなたは水脈をまっすぐに」
「わかった。ではまた後で」
メスカリンペヨーテもまたほとんど彼と同感だった。ここに来る代わりに蛇が取っている行動の全体は知らなかったがきつねが現れたことでおおよその察しがついた。しかし口にはしなかった。
ドミニクが駆けていった。目指す地下庭園はまだ先だった。彼は走り出してすぐに後方でガタンという音を聞いた。井戸が閉じられたのだ。

地下庭園・5（後書き）

名前が変わってからはじめての更新です。これからも変わらずよろしくおねがいします。

地下庭園・6

走るのに疲れると水を飲んで休んだ。水は庭園から流れてきている。

外の様子がわからないので、ドミニクにとって夕暮れの時がずっと続いているようだった。彼はひたすら走った。よくないこと、よくない日だと思いながら。確かにこの日は異変続きだった。この異変がほんの序盤だと彼はまだ知らなかったのに、なんとなく予感していた。

数時間後、ずっと走り続けたおかげで脚に痛みが走りだしたころ、ドミニクは自分が柔らかい苔の上を走っていることに気付いた。周囲は暗いままだった。苔のひんやりとした感触が疲れた足裏に優しかった。走る速度はメスカリンペヨーテと別れたばかりのときからだいぶ落ちていたが、もう少しだけと、自身を奮い立たせた。走る間に彼の頭に様々なことが浮かんだ。マールバールの御方、今もこの地をうろついているかもしれないきつね、井戸をふさぐメスカリンペヨーテ、そして忽然と消えたNのこと。これらを結び付けて考えるには、今日一日のことしか知らない彼には難しい。若い彼はもう何度も繰り返された蛇ときつねの闘争をよく知らなかったし、自分がすでにそれへ協力していることも理解していなかった。休戦が解かれたことはもはや明白で、当初は二者のみで行われていた闘争は大勢を巻き込みながら、不可能にしか思えない収束に向かっていた。

限界が近いと思って、ドミニクは苔の上にうずくまった。息を切らして遠くに目を凝らすと、針の穴でついたような光明が見えた。その一点を見つけると、思うようにならない身体を立ち上がらせ、ただそこだけを見つめてよろよろと歩きはじめた。

二頭のライオンを両脇に従えながら、ルップはマールバールの一族の中を進んだ。歓迎の様子はなかった。ライオン達は緊張し、警戒していた。実際のところ、ルップとマールバールが相対している場面を見たことのある一族の者は、彼に付き従う年かさの二頭のほかいなかった。ルップの姿を遠巻きに目にしたことはあっても、彼についてほとんど知らない。それが警戒の理由だった。

地下庭園の入口まで、二頭のライオンは付き従った。入口は古びた大理石の階段だった。ところどころ風化し、崩れながらもかつての細密な彫刻の面影が残っていた。

階段は、充分な広さを持っていたが、サイのルップが通るには些か窮屈そうだった。地下に続く階段を遠巻きに囲んだライオン達が見守るなか、階段の一段目にルップが足をかけたとき、彼は人間の姿をしていた。それは黒い甲冑を纏った騎士の姿だった。装飾品のような兜の影で顔は隠れていたが、そのことがまた、彼に威厳を持たせるようだった。彼の背中が小さくなったころ、ライオン達は入口に集まった。彼が歩むごとに甲冑の部品がたてる音が聞こえた。

その黒い甲冑がルップの“毛皮”だった。重たく、金属音を鳴らすそれは、ルップが気付いたときから身に纏うものだった。捨てれば身軽になる。これまで何度かそのことを考えたが“毛皮”を手放すことは出来なかった。ときに重たく彼を苛むものについて諦念を抱きながら彼は存在する。

ルップは蛇やきつねのほどの者ではなかった。長く生きてきた中で求めに応じ、どちらにも協力してきた。彼等の闘争の方法は様々で関与しないときもあった。ルップにとって世界は広く、知れない部分が大きい。マールバールがこの地を治めはじめた頃から、この東の果てと呼ばれる草原から離れたことがない。重たい甲冑が邪魔をした。以前は、騎士の姿に相応しく、立派な一頭の馬を持っていて、それに跨がり身軽に移動した。

その馬は、かつてきつねの側についたとき、蛇にとられたきりルップの元に戻ってこない。おかげでかれは故郷とも言えるこの草原

に閉じ込められ、サイの姿で過ごすことが多くなった。これも諦めの一つだった。どうにもならないこと。もうこの手に戻らないこと。
きつねが今度こそすべてを終わらせるつもりなら、早いところけりをつけてくれてかまわないとさえ思った。しかし、このときはただの一歩を踏み出すことにも気が進まなかった。

ドミニクは、庭園に辿り着いたと同時に気を失ったようだった。彼の名を呼ぶ声があり、重たい瞼をあげると彼が仕える主君の姿があった。

「気付いたね。余りにも急に倒れてしまったから心配した」
優しい声音で自分を見下ろす王様に、懐かしさを覚えるほどではなかったはずなのに、とても長い間会っていなかったように感じずにいられなかった。意識がはっきりしてくるとゆっくり起き上がると、顎を地面につけ、帰ってきたことの挨拶をした。そしてNのこと、メスカリンペヨーテと途中きつねに会ったこと、そのため彼がここに来るのが遅れていることなどを報告した。マールバールの王様は、時々質問を差し挟みながらドミニクの話を聞き終えると、神妙な声音で、お前も覚悟しなさいと告げた。
「それはどういう意味ですか」
「そうでなければいいと思ったのだけれど蛇ときつねが争いを始める。今度はここも無関係でいられない」
王様は悲しそうだった。この地がこれ以上、荒廃しないですむだろうかという言葉にドミニクは自分の背筋が少し震えたのがわかった。

昔日の抜け殻・1

夜は安らぎを得られるときでもあったが、この北の地には関係なかった。永遠に続く夜。一年の中で二週間ほど南方の空が明るくなったが、太陽は決して姿を見せない。ぼんやりとした光を見るとき、ピストゥは後ろめたい気持ちがした。太陽は彼が見てはいけないものだった。姿は見えずとも、裳裾がのぞくような光でさえ彼はおそれをもって臨んだ。

キュメルは家の外にいた。寒さについて家の中も外でも変わりなかった。ピストゥは気にならなかったし、数少ない訪問者であった蛇にしてもそんなことに頓着しなかった。キュメルの場合はどんなだろうとピストゥは思った。

誰も来る気配はなかった。四方すべて、どの方向も静まり返っていた。星座の位置を確かめるとピストゥは窓を開けて家から離れたところに立つキュメルに呼びかけた。

「蛇は来ないよ」

「何故わかるんです？」

「時間が経ちすぎている。お前のことを察したんだろう」

本当は約束の時間に来られない場合は何かがあって来られないということを示し合わせていたのだが、正直に言う気がしなかった。

「本当に来ないんですか？」

「来なくて困るのは僕ではないから知るものか。君はどうする？きつねを探しに行くなら行けよ。僕の言ったことを確かめるならそちらの扉から入って来るんだな」

ドミニクは王様に告げられたことに動揺を感じたが表に出さなかった。そっと自らの予感が現実になったのだと言い聞かせた。

「墓の方に行ってしばらく休みなさい」

マールバールが言った。ドミニクはそれに従った。尾は垂れていた。何を成せばよいのかわからなかった。覚悟とは何だろう。死のことだろうか。それとも、ひどい屈辱を受けることだろうか。いずれにせよ、日常がもうなくなってしまうのだ。王様から離れていきながらドミニクは考えた。

墓はかつての王達と皇帝、その一族のための宮殿だった。巨大な墓所の側には彩りあざやかに花々が咲いていたが、よく見るとしおれていた。力なく垂れ下がった茎に鼻を押し当てて、ドミニクは動きを止めた。

王様はこの場所が寂れてしまわないよう気にかけていた。墓といいながら、ここに眠る肝心の亡骸はなかった。また、宮殿は未完成で、完成することはないだろうとドミニクは思っていた。去っていった者を偲ぶために作られ始めたのだが、その者たちもいなくなり、目的を失ってしまったのだ。彼らを知る最後の一人となったマールバールは墓所を完成させようとしなかった。それは彼の手に余った。せめての思いで殆ど完成していた庭園に花を植えた。

ルップは階段を下り終え、庭園に立った。周囲を見回すまなざしは油断なく、懐かしさや親しみなどはなかった。自分が今からすることは紛れもなく裏切りそのもので、どんなに言葉を使っても欺くことはできないことを思った。どのようにして償えるのかもわからなかった。

マールバールを見つけた。ルップが訪れたことに気づき彼を見ていた。ルップは何も言わず突進した。卑怯ならそれほどいいだろうと思った。とても冷静に体が動いたことを意外に思わなかった。

不意をつかれたマールバールは身構えたが遅かった。ルップが振るった剣はライオンの首をはねた。傷口から血液がこぼれ王様の首が落ちるかに思えた次の瞬間、地面に転がったのは王冠だった。それが王様の“毛皮”だった。マールバールはまだ生きていたが、ルップの一撃は彼の左目に傷を負わせていた。そして、毛皮を手放した彼はライオンの姿を失っていた。

欠けた視界や痛みの中、マールバールは手探りで王冠を側に引き寄せようとしたが、わずかの差で空を掴み、ルップがそれを手にした。兜の奥に悲痛さを表す瞳がのぞいた。地面に這いつくばったマールバールにルップはさらに刃を浴びせた。王様のうめき声がルップの耳に尾を引いた。王様が何も言わず、動かなくなったとき、ルップがはじめて口を開いた。王様が聞いているのかわからなかった。

「ここに来る前にきつねに負けたんだ。彼に逆らえない。どうか許さないで」

そういうと、彼はその場を後にした。来た道を引き返すのではなく、ドミニクが通ってきた方向に向かっていた。

ルップの背中に投げかけられる声があった。

「蛇は見ていましたよ！」

ルップは振り返らずに逃げていった。

昔日の抜け殻・1（後書き）

だいぶ間があきましたが、思い出して読んでくださった方がいたら
ありがとうございます。

昔日の抜け殻・2

ルップは逃げた。鎧はとても重かったし体中が痛んだが走り続けた。この苦痛は彼が王様に追わせた傷のそれに比べたら、何のこともない。腕に抱えた王冠は熱く感じられた。これをきつねに渡してはいけない、とルップは思う。罪悪感からは逃げない。卑怯な行いを躊躇わない。きつねの支配下におかれてもマールバールへの友情はなくならない。彼にできるのはきつねの命令が聞こえない場所へ王冠を持って逃げることだった。不本意であっても彼に従わざるを得ない以上、彼がとれる道は限られていた。

逃走に彼の鎧は不利だったが、やはり捨てることはできなかった。息苦しく喘ぎながらルップは地下庭園のはずれにさしかかった。このとき遠景に獣の姿を見つけた。まさか、と思ったが、近づくにつれて確信した。それはかつて蛇に掠された彼の馬だった。

「フェリシタス！」

用心のためルップは走るのをやめて歩きだしたが、心ははやっていた。ようやく声が届くまで近づいたとき名を呼んだ。その名を呼びかけた瞬間、白馬の毛並みは銀色に輝き、ルップの元に駆け寄ったときそれまで備えていなかった馬具ひとそろいを備えていた。その装備はルップだけのためのもの。彼が彼の馬に乗るためにあるものだった。

ルップとフェリシタスは顔を寄せ合って再会を楽しんだが、ルップはすぐにここを離れなければならないことを口にした。ルップが名前を呼んだときから彼らの関係は元に戻った。フェリシタスはルップをのせて走り去った。彼らがここまできたときよりも速く。

馬は地に投げ出されたNの側を走り抜けていった。Nは目を開けて遠ざかる彼らを見送った。完全に見えなくなったとき、Nの側に

たつ者があった。
メスカリンペヨーテだった。
「ここで何をしているんです？」
「マテウス……」
「蛇に面倒をかけましたね」
そう言いながらNの頭を蹴飛ばした。
「やめろ。マテウス・ペシェル」
さらになにか暴行を加えようとしたメスカリンペヨーテことマテウス・ペシェルは動きを止めた。それどころか身体は縮み、小さな男の子になってしまった。
「召使いなんてつまらない！」
声音まで変わってそう言い放つとふんっと鼻を鳴らした。するとメスカリンペヨーテの足下でNもまたふんと鼻で笑った。仰向けになった。少しだけ思い出していた。
彼方でちかちかと光るものがあった。Nは起きあがった。
「蛇が呼んでいる」
蛇は王様を宮殿に運んだ。王様は意識を失っていた。休むように、と言われたドミニクが異変に気付き、挨拶もそこそこに駆け寄ってきた。

王様の姿はあわれだった。毛皮を失った王様はほんの子供の姿をしていた。それが自らの血に濡れている。蛇の指からも血が滴り落ちた。

「命は助かりますよ」

宮殿の奥の方へ王様を運びながら蛇が言った。ドミニクがよく見ると、蛇によって血は止められていた。しかし傷は塞がりきっておらず、失われた血はどうしようもなかった。

「命は、とはどういうことですか」

蛇の言葉に安堵しながら覚えた引っかかりを口にした。なぜ王様はライオンの姿をしていないのか気になった。蛇は黙って進んだ。やがて寝室にたどり着いた。そして誰のためでもなくなったはずの大きくて綺麗な寝台に王様を横たえた。

「王様の毛皮はどうしたの？」

人の姿をしているにも関わらず、“毛皮”である王冠がないことを、ドミニクは疑問にした。

「奪われたようです」

「誰に？」

「サイのルップです」

その答えはドミニクの予想とちがった。

「彼は王様と親しかったのに。きつねという者のためですか」

「そうだと言えるけれど、きつねがルップをそうさせたのは私のためだから、私のせいでもあるんだよ」

何故蛇に止められなかったのだろう、とドミニクは思っていたが、その答えを聞いて、蛇だって出来ることしか出来ないのだと思った。蛇はさらに言葉を続けた。

「王の証を失ったいま、マールバールはこの地にいることが出来なくなりました。毛皮で守られずして、彼はなんとかよわくか細いことでしょう。ここでは生きていけません」

「それでは王様は何処に行けばいいのでしょう」

「お前はマールバールが王でなくとも従うかい？」

「勿論です。王様が自ら赴けないのなら僕がお連れします」

やりとりから蛇によって言葉を引き出されている、と思った。

「それなら、お前も毛皮をおぬぎよ」

昔日の抜け殻・2（後書き）

またしても久しぶりの更新です。アクセス解析をみると、こんな小説でも読んでくださる方がいて嬉しく思っています。次の更新が早いか遅いか本人もわかしませんが、見かけたら覗いてやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7253a/

シュピール

2011年8月19日03時16分発行